山陽新聞『一日一題』より　第五回

安心感と寛容さ

学校での相談日には多くの母親が来られる。無論、子育て上の相談が多いが、「子どものことより、私の不安な気持ちを聞いてほしい」とあらかじめ断っての相談も多い。「自分が不安だから、わが子を支配しているのではないか、分かっていても追い詰めてしまう」などの葛藤が語られたりもする。

「やさしい言葉かけが大切なのは分かっています。でも、その言葉を求めているのは私なのです」と、率直に反省する人もいる。そういうとき、私は「人からもらわなければあげられないものね」と対応する。…やさしい気持ちになりたくて来られたことが分かっているからである。

不安だから子どもを支配する、許せない、イチャモンつけたくなる。前にも書いたが、不安を動機とする人間の行動には空回りが多すぎる。

元来人間は一人では生きられない存在である。しかし、この「多忙という魔物」が人間社会から「支え合う」関係を奪い去り、孤立させ、不安にさせ、いらだたせている。

そんな時代だから、教師の仕事の中に、「親の不安やイライラへの対処」という仕事が、いつの間にかつけ加わった。ときには、どう考えても理不尽な要求をつきつけられることもある。多くの教師は、子どもへの対応には馴れていても、親への対応は苦手である。杖塾にはそのような重荷を背負った教師が多く来られる。それを担い切れない自分を責めながら…。

今の社会は、親も子も教師も孤立している。孤立した者同士が支え合わず、いらだちをぶつけ合っている間は何も変わらない。子どものためには、安心感のある寛容な環境づくりこそが求められる。

沢田の杖塾　主宰　森　口　章

（二〇〇七年　七月五日夕刊掲載）